
女装天女！

フィサリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女装天女！

【Nコード】

N5587Y

【作者名】

フィサリア

【あらすじ】

「女装ヤクザ・幽姫洋一、艶やかに降臨！」

ありえないシチュエーションが織り成す、ハイテンション・スクラップステイックアクションコメディ。

FC2小説に掲載しているものです。

長編ですので、どうか気楽にゆっくりとお楽しみください。

二代目

全身が楽にうつる大きな鏡の前に洋一は立った。

鏡の中には、何も身に付けていない、生まれたままの自分の姿がある。

洋一の目が、その後ろにあるワードローブへと移動する。

開かれたその扉の中にある、無数の服。多種類のバッグ。

そしてウィッグ。

それらは全て女物だ。

ゴクリとのどが鳴った。

..... 今なら引き返せる、やめる、やめるんだ！

内なる己の声に、洋一の動きが止まった。

..... なんでヤクザの俺がこんなことに.....

もう一人の自分がため息をつく。

そして洋一は、呼吸をするのも忘れて固まった。

彼は幽姫洋一ゆうしめい・やういち30歳。

この街の暴力団組織、紅椿一家会長の不肖の息子、つまり跡継ぎである。

関西の指定暴力団に所属する紅椿一家は、全国レベルからいえば吹けば飛ぶようなちっぽけな組だが、この地方都市では、商業・工業・政治と、あらゆる分野に根を張る、裏の実力者だった。

その二代目と言われる洋一は、全身でヤクザを表現している父・義隆とちがって、銀河鉄道の某美人もつつむいて泣き崩れるといわれるくらい美しい眼と身体をした、母・凜にそっくりだった。

そのせいでやたらとモテた。女性はもちろん男にも。

言い寄る女の子たちには愛のキスを。

鼻息を荒げて近寄る男どもには重い拳を、おしみなく与えてきた。そうやって生きているうちに、ヤクザの息子という肩書きも後押しして、いつの間にか立派な次期二代目と言われるようになっていた。持ち前の美貌とは裏腹な洋一の凶暴性と悪事の際の頭のキレも、これからの彼の地位をゆるがないものとしていた。

今夜もこの街で一番のクラブで飲み明かし、お姉さんたちの決しておせいじではない熱い視線に見送られて店を出た洋一は、送るといふ組の者をムリヤリに帰すと、一人深夜の街を歩き出した。

「二代目、ごくるうさんっス！」

「おつかれさまっス！」

洋一の姿はどこへ行っても目につくらしい。
道行く多種の人々からそんな挨拶が彼に贈られた。

洋一は鷹揚にそれらを受けながら、少し足を早めて通り過ぎてゆく。
盛り場を離れ、シャッターの下りた商店街へと足を踏み入れたところで、洋一は止まってあたりを見回した。
照明に照らされたアーケードの中は、人っ子ひとりおらず、まるで墓場のようにシーンと静まり返っている。

洋一のかなで肩がガクリと落ち、弱いため息が口から漏れた。
- - - - - やつと独りになれた・・・

さっきまでの辺りを睥睨する目と威圧する足取りは消え、美しい大きな瞳をつるませ、長いまつげをしばたかせて、また歩き出した。
- - - - - どうしてこうなっちゃったのかなあ・・・
うつむいて歩きながら、独りになるといつも考えることをまた心の中で繰り返した。

本当の洋一は、その姿形を同じで、とても繊細で華奢な心の持ち主だった。

学問、スポーツともに優秀。華道、茶道、日本舞踊は師範級。

おまけに絵を描き、詩を作り、歌までうたうという、西洋のルネッサンス人の生まれ変わりのような母に似たのだと洋一は思っている。

むらがる女の子たちに対応しているうちに、無類の女ったらしと噂

されるようになり、いやらしい目で言い寄ってくる男どもの顔面をグーで連打してしりぞけていたら、狂犬と呼ばれるようになった。全てはふりかかってくる火の粉を払うための諸行だったのに、やがて誤解はくつがえせないほど深まり、今ではヤクザである。

洋一は、巖を刀で斬りつけてから、それにエロスを塗りたいくったよ
うな父のいやらしい顔を思い出して、ブルルと身を震わせた。

―――― イヤだ！絶対にあいつみたいになりたくない！
しかし、彼はヤクザである。

同類、それも組織経営なら親をものぐとさえ言われていた。

少しでもヤクザらしくするために坊主に刈つてある髪――――本
当は綺麗で細く明るい栗色の髪だった――――をガリガリとかい
た。

次に洋一は、アルフォンス・ミュシャ描く女性に、菩薩の知性と微
笑みを足して、神が造りたもうたフィギュアを持つ、母の姿を思い
浮かべる。

―――― ああ、かあさんはやつぱすごいなあ、カンペキだ・・・
・ なんてあいつなんかと結婚したんだろう

ここで彼の為に断つておくが、洋一はいわゆる世間でいうマザコン
ではない。

母である凜は、女性と言う偶像を極めた存在ではあったが、立派な
社会人でもあり、己の息子に惑溺などせず、また必要以上に彼を精
神的に近づけたりはしなかった。

だいたい彼女自身がヤクザの娘だったのである。

だから洋一は純粹に、まるで少女が宝塚の男役に憧れるような気持
ちでもって、母のことを敬愛しているだけなのだ。

しかしその母は、洋一が小学校にあがった年に家を去り、そして成人した年に住んでいたマンションの鍵とあるものを置き土産にして、イタリア人のダーリンと共にフィンランドへと旅立ってしまった。

洋一は世界地図を片手に、そのフィンランドを探したこともある。南米のどこか、たしかコーヒー豆の産地だったと思っていたその国は、バルト海に面した北欧の寒い国であった。

緯度、軽度共にまったくちがっていたし、なによりも日本からは遠すぎた。

洋一は涙を飲んで、母に頼るのをやめ、己で生きなければならぬ。まあ実際の話、生きていくのは楽勝でできるのだが、幸せとは程遠いクライムな世界でこれからもやっていくのかと考えると、気がどんどん滅入ってくるのだった。

逃げ場はなく、またやりたいこともない。

ただ行き詰まり感だけがあった。

かといって、盗んだバイクで走り出すようなことはとっくの昔に済ませてあるし、だいたい30でヤクザの自分がまたそれをするわけにはゆかない。

..... どうしてこうなっちゃったかなあ.....

結局、この問いに戻ってくるといふ無限ループの中、洋一が切ないため息をついたとき、アーケードの脇の暗がりから、とつぜん人が飛び出してきた。

いつもの洋一なら母ゆずりの運動神経でヒラリとかわすのだが、落ち込んでため息をついている最中だったので、まともになぶつかってしまった。

急に自分の懐に飛び込んできた人物は、黒いヒラヒラの布で出来たメイド服っぽいものを着ていた。女の子のようだった。

突っ込まれたわき腹が痛かったが、ヤクザモードでないときの彼は優しい。

どなりもせず、彼女の肩をそっとつかむと、

「大丈夫ですか？」と声をかけた。

「ごめんなさい、すみません！」

彼女はうつむいたままでそういうと、するりと洋一から逃れて、アーケードの中を駆け去っていった。

あまりの早業に洋一はしばし、ぼうぜんとしていたが、彼のすごい頭脳はすでにうごき始めていた。

「……あれ……なんか声低くなかったか？ それに肩もえらくがっしりとしたような……」

5秒で答えは出た。

「……あつ！ 男！？」

正解である。

どうも最近、水面下で秘かに増えてきているという、女装の男、女装子というのに当たったらしい。

夜のドキドキお散歩を愉しんでいる最中に偶然、洋一になぶつかってしまったようだ。

めずらしいものを見た気分で、また歩き出そうとしたとき、洋一の胸……いや、正確には恥骨の奥あたりがピクリと震えた。

……なんだ？

思わず足を止めてしまうと、今度は脳内で何かがドクドクと溢れ出してきたのを感じる。

それに同期するように、心臓がコトコトと音をたてはじめた。

……ど、どうしたっていうんだ、俺！？

訳がわからず目を見開いて立ち尽くした洋一の胸ポケットの中で、存在を誇示するようにチャラツとキーが音をたてた。

それは、母が洋一に残してくれたマンションの部屋のキーだった。

午前3時。

洋一は震える手でキーを取り出すと、ガラスドアを開けて母のマンションのエントランスに足を踏み入れた。

エレベーターで35階へと上がると、扉を開けて部屋に入る。

玄関は暗く冷えていた。

すぐそばにあるスイッチを押して明かりをつける。

短い廊下が、彼をいざなうようにパツとあらわれた。

誰もいないのに、洋一はそつと足を忍ばせて進んでゆく。

2LDKのどこにでもある小洒落た部屋だった。

これまでもここへは何度もやってきていた。

別に母を偲ぶわけではなく、組や彼女たちに知られていない、独りつきりになれる場所だったからだ。

また壁際にあるスイッチを押して照明をつけると、人が住んでいないことが不思議なくらい物がそろった寝室が映し出された。母・凜はすべてを置いて、この部屋を出て行ったのだった。

理由は知らない。

実は大雑把で豪快なところがある凜なので、面倒で身一つで去ったのかもしれない。

そしてここで洋一は、全裸になって鏡の前に立ってしまったのだった。

長い回想は終わり、現在の洋一である。

自分がなんの目的でこんなことをしているのか、彼はわからなかった。

あの女装子に突き当たってから、憑かれたようにここへやってきて脱いでしまったからだ。

ただ自分が今から何をしようとしているのかは、はっきりとわかっていた。

とまどっているのは、それを認めたくないだけなのだ。

その証拠に洋一の身体はまた動いて、ワードローブの下にある引き出しを開けている。

すーっと音も無く開かれたそこは、下着が咲き乱れるお花畑だった。洋一の脳内に流れ込んでくる、妙な液の分泌量がグンツと跳ね上がった。

そして視線が己の股間へと向けられる。

そこにあるよう洋一自身……彼はそれを「暴れ坊主」と呼んでいた……は、こんなにもドキドキしているのに、なぜかおとなしかった。

……なんだ？ 俺は心の病なのか！？

そうでもあるし、ないともいえよう。

とまどう心とは別に手は着々とまたうごき始めて、黒いセクシーなランジェリー、俗に言う「ひもパン」を指がつかんで履いてしまう。そして絶対に合う訳がないと思っていた、母のブラが己の胸にピタリとおさまったとき、その動きは、もはや止めることは不可能なほど加速した。

無意識に目は、さきほどの女装子が着ていたようなメイド服を探している。

しかもあるはずがないそれが、なぜかあった。

……か、かあさん……あなたっていう人は……

息子の将来を見通していたかのようなチヨイスであった。遠いフィンランドのある方角を洋一は思わず見上げてしまったが、それはまったくの方向違いだった。

フレアなスカートをはき、「入るかな？」と思いながら、そっとブラウスに手を通す。

なんなくそれは体にフィットした。

悪魔のしわざかと思うくらい偶然だったが、親子なんだから他人より体型が近いのは当たり前なので、実は偶然でもなんでもない。ただ洋一は、それを神のしわざだと思った。

何種類も吊るされているウィッグの中から、長いストレートな黒髪のものを選んでかぶる。

完成した己の姿を洋一は、張り裂けそうなくらい鼓動している胸を押えながら、鏡に映してみた。

化粧をしていないのでさすがに違和感があったが、意外と見苦しくない自分が中に見えて、洋一はおどろいた。

学生時代は剣道で鍛えぬき、今でも素振りをかかさないう身体だったが、なぜか筋肉質に見えず、あくまで見た目は華奢でか細いことがこの現象に利を生んでいた。

この身体と顔のせいであらゆる精神的災害を被ってきたのに、皮肉にも今はこんなに自分の胸をときめかせている。

原因と結果である今とのギャップに、洋一は頭がクラクラした。

しばらくそうして自分の姿を見ていたが、ふと今までの緊張がゆるみ、目を鏡からそらせた。

すると、その先にドレッサーが見えた。

……ああ……もうそのくらいにしてえ……！！

そう胸中で叫んだが、再び火がついた心は許してはくれない。

というか、すでに語尾が女性化している。

高校時代にビジュアルバンドのボーカルを、その時の彼女にムリヤリやらされていたので、化粧方法がわかっていたのがまた不幸だった。

母は仕込んだように化粧品もすっかり残していつてくれたので、あつという間に顔ができあがる。

「あつ！」

自分の顔を見て、洋一は声をあげてしまった。

双子とはちよつと言いつぎだが、年の離れた姉妹くらい母に似た姿が鏡の中に見えたからだ。

さつきまであつた、ウィッグや服とのズレがかなりなくなってきた。いる。

これは凶悪さをだすために細く剃りあげている眉の効果も大きかった。

洋一は、ヤクザになって初めて、己の職業に感謝した。

適当にファンデーションをたたき、まつ毛をビューラーではねあげ、マスカラを塗ってアイライナーを引いただけなのに、目はぱっちり大きく広がって見え、つけまつ毛など必要ない。

しかもなぜかびしょびしょに濡れている瞳が妖艶なものを発散しており、アイシャドーすらいらなくらいだ。

元々細いフェイスラインがファンデでさらに引き締まり、顔を構成するパーツ一つ一つをうまく演出している。

とどめの唇は、小さな薔薇が咲いているように、輝きを放っていた。

「あ……………」

ついに洋一は、あまりに変貌をとげた己の姿に気を失ってあおむけに倒れこんだ。

精神と肉体のコペルニクスの転換に耐え切れなくなったようだった。だが数秒でガバツと起き上がり、またドレッサーの方へと駆け寄ると、完成した自分の姿を見始めた。

いつしか窓の外には朝日が昇り、チュンチュンと雀の鳴く声があったが、洋一は夢中で気がつかなかった。

シン

「おはようございます!」

「ごくりうさんっス!」

事務所にはいると、ドスの効いた声や妙に甲高い声の合唱が洋一を迎えた。

無言で挨拶を受けながら、個室となっている自分の執務室のドアを開けて中に入ると、どっかりとデスクに陣取った。

結局あのと、ゴミ回収車の夕焼け小焼けのメロディが聞こえてくるまで、女装して遊んでしまった。

そしてベッドに倒れこんでさっきまで寝ていたのだが、身体がまだだるい。

一晩で五回戦連続でエッチしたようなけだるさである。

一日一回は事務所に顔を出す決まりなのでしかたなくやってきたが、すぐに帰るつもりだった。

一時間ほどここで時間をつぶしてから出ようと考えたところで、また恥骨の辺りがソワソワしはじめた。

うっと思わずうめき声が出て、洋一はあわてて口に手をやる。

「一晩だけって約束だったのに……なんでもたあそこにいこうとしてるんだ、俺？」

いったい誰にそんな約束をしたというのだろう。

しかもこのセリフの40%ぐらいは、すでに女性化している。

洋一の額を脂汗がおおったとき、ドアがコンコンと控えめにノックされた。

瞬時に極道モードへと移行して、低い声で応える。

「おう、はいね！」

「失礼します」

組事務所に似合わぬ上品な声がして、男がひとり入ってきた。

洋一の付き人兼ボディガードの見習い組員・さへじま 冴島 心しんだった。

「兄貴、お茶をお持ちいたしました」

そういつて冴島は、馥郁な香り漂うカップを、音も立てずに洋一の目の前に置いた。

「おつ、ありがとよ」

こう答えてカップに手をのばすと、綺麗な夕日の色をした液体を口にした。

「……うまい…… やっぱシンの淹れてくれた紅茶

は一味ちがう

目を閉じてそう洋一は思った。

シン。

二人だけの時、彼は冴島をそう呼ぶ。

そして冴島も洋一のことを「兄貴」と呼ぶ。

急いでまた断っておかねばならないが、この二人の間にその道の関係はない。

今までの洋一を見ているから「兄貴」という単語が妖しく聞こえてくるだけで、どちらもノーマルである。

いくら言ってもみんな自分のことを「二代目」と呼ぶし、そしていくら頼んでも今までの付き人は紅茶を旨く淹れてくれなかったが、シンは違う。

それに言葉遣いも丁寧で優しく、不必要に語尾のあたりに、ツとカスをつけないところも気に入っている。

つまり洋一にはピッタリなのだが、ヤクザにはまったく向いていない男。

それがシンだった。

ちらつと横目で見ると、シンはお盆を小脇にかかえ、執事のように謹厳な表情で、洋一の邪魔にならない位置に立っている。

そこは、彼が何かを言いつけようとしたとき、サツとすぐに一歩で前に出てこれるといふ絶妙なポジションだ。

近いのに主の目の妨げにならない、あくまで影として立てる位置。いったいこの男はどこで、こんな技術を学んだというのだろう。

洋一がカップをソーサーに戻すと、すつと新聞が置かれる。

左手を動かすとすぐに煙草が手渡される。

だが、シンは火をつけはしない。

洋一が自分でつけることを好むからだ。

新聞から目を離さずに灰をポンポンしても、床を汚すことは決して無い。

そこには必ず灰皿があるからだ。

おまえはドラえもんか、と突っ込みたくなるほど、すぐに望みをかなえてくれる男。

そう、それが冴島 心であった。

「シン、おまえうちに入って何年になった？」

今日も満足して、洋一は優しくそういった。

「三年になります、兄貴」

はつきりとはしているが、ドスを控えた慇懃な声でシンがこたえる。

「そうか……ずいぶんともう見習いも長いな」

シンが少しうつむく。

その恥じ入る表情を見て、洋一の胸がチクツと痛んだ。

債権の取立てにいかせれば、相手に同情して自分の有り金を全部投げってくる。

博打を経営させれば、まっとうなギャンブルにしてしまい、利益が上がる。

かといって女をだますことなどできっこないから、スケコマシでも食べていけない。

唯一シンができるヤクザらしいことといえば、ずっとやってきた少林寺拳法でのゴロまきだが、自分から仕掛けるということができない自衛隊のような専守防衛・局地戦闘タイプなので、やっぱりボデイガードどまりだ。

まだ21だから今はいいとしても、これから先はヤクザではとても生きてはいけない、そう洋一は考えている。

ゆくゆくは足を洗わせてカタギにしてしまおう、そう彼は決めた。だが、シンがいなくなった後のことを思うと、つい決心が鈍くなるのだった。

洋一の考えを見透かしたように、シンが心のこもった声でいう。

「私は、兄貴のお世話をずっとこのままさせていただければ、うれしいです」

洋一の目がシンを見た。マジ顔だった。

「……すまん」

「いえ、それが本心ですから……」

ええやつちゃなあワレ、とニセ関西弁で洋一が心中、感動の嵐に包まれている中、シンは、はにかんだ笑みを浮かべて一礼して部屋を出て行った。

ふーっと鼻から息を抜くと、洋一はデスクの上に新聞を投げた。

「なんだかんだいってもヤクザだもんなあ。シンには似合わないよ

な・・・」

小さくつぶやくと、背中を椅子にあずけた。

本皮を張った椅子が、キュツと小気味よい音をたてて、彼を包み込んだ。

彼女たち

ジリリリリーン！ ジリリリリーン！

事務所をでたところで、洋一のケータイが古風な黒電話の着信音を奏で出した。

でると、彼女たちの一人である真子の声が聞こえてきた。

「洋ちゃん、今夜ヒマあ？」

「おお、あ……」

空いてると言おうとしたとき、ちらりと母の部屋が脳裏をかすめ、口ごもる。

「あーあああ…… あかんわ、仕事やねん」

「ちよつと！ その、あーの間と関西弁はなんなのよ」

甘ったるかかった真子の声のオクターブが下がる。

「いや、さっきテレビで観た芸人のしゃべりがうつつちゃって」

「……なんかないね。洋ちゃんテレビきらいじゃん」

もつと声が低くなった。

バカで能天気なキヤバ嬢なのに、こういうカンはずいぶん働くのか、と洋一は舌打ちしたくなる。

「ほかの女の人とかじゃないでしょうね？」

「バツカ、ちげーよ。なんでそうなるわけ？」

「だって、今日の洋ちゃんなんかいつもとちがう。かわった気がする」

「だから、なにそれ？」

「カン。でもなんかゼツタイかわった！好きな子できたの？」

意味はまったく違うのだが、変わったところは的を得ている。洋一自身は決して認めないだろうが。

言いよんだ洋一の耳に、殺気が送り込まれた。

「……今から洋ちゃん部屋いく。帰るまでずっと待ってるから」

うっ、とうめき声がでそうになって、洋一はあわててケータイを遠ざけた。

顔と身体は超一流だが、頭の中がお花畑の真子は、とても嫉妬深く、一度うたがいをもったことは全て明らかにしなければ、延々とそれを言い続けるのである。

なので、ぜひとも今は会いたくなかった。

…… や、ヤバい！部屋に帰れないとなると、あの部屋にずっといなきゃいけない

そうになると、もうこちら側へは二度と戻ってこれない気がして、洋一はぞくつとした。

それにいつまでもシンの送迎を断るわけにもいかないから、マンシヨンの存在も組にバレてしまう。

まだ初秋だというのに、まるでサウナに入っているように汗がドツと吹き出てシャツを張り付かせた。

「あはははは。まったくなにしてんだよ、おまえ。ちげーってば」
力なく笑いながら、洋一は考えた。

とりあえず今夜は部屋に帰って真子の誤解をとこうか。

しかし、妙にカンだけはいいいあの娘は、自分の変化の理由を察知してしまうかもしれない。

そうなると破滅だ。

「わ、わかった！ちょい仕事まで時間あつから、今から会おうぜ」
「……」

「なんだよ、まだうたがってるの？しょうがねえなあ……じゃ、

これから信じられるようにしてやるよ」

これから・・・の後に続くセリフに艶をもたせて、洋一はケータイに吹き込んだ。

力技で行く気だ。

真子は野生児だけにエッチが好きだった。

「あ・・・じゃあいまからいつものホテルのラウンジいくね」

真子の声が一瞬で甘いものに戻った。

成功である。

洋一はニヤリと笑うとガッツポーズを決めた。

「おお、早くこいよー。あと、シャワーは浴びずに、な」

「イヤーン、洋ちゃんのエッチ！」

エッチはてめえだろうが、と心の中で突っ込んでおいてから、洋一は二言三言はなしてパチンとケータイを閉じた。

「兄貴、お車出しましょうか？」

急に耳元でシンの声がして、さすがの洋一もびっくりして、ヒッと悲鳴をあげて飛びのいた。

「申し訳ありません・・・ おどろかせてしまって」

「し、シン！ おまえ気配消しすぎだつて！」

「失礼しました。お電話の邪魔かと思つて控えておりましたので」

シンはそういつて軽く頭をさげた。どことなくいつもより慇懃無礼な感じがした。

その仕草をみて洋一はハツとした。

・・・こいつ、電話の相手が真子つてことも、その内容もわかっただけだ！

そう気がつくのと、さすがに気味が悪くなった。

「車を回してきますから、少しお待ちください」

くるりと優雅にターンして、足早に去つてゆくシンの背中を見つめながら洋一は、「きっとシンは忍者の末裔かなんかに違いない」そう真剣に思うのだった。

洋一のテクニクをもってしても、真子を納得させるのに3時間もかかってしまった。

セックスは嫌いではなかったが、同年代の男より数多くこなしてきたし、また様々なシチュエーションもお試し済みなので、最近ではあまり高かぶらなくなっていた。

疲れた顔でホテルを出た洋一は、シンの運転するジャガーに乗り込むと、ふうーっと息を天井へと吹きあげた。

「兄貴、どちらまで？」

ハンドルを握って、まっすぐに背を伸ばして座っていたシンが、そうたずねてくる。

洋一は考えた。

息も絶え絶えで、ベッドに横になったまま真子が言ったセリフがよみがえる。

「今夜、洋ちゃんと泊まる。しばらく部屋にいるから」

彼女がそう言ったということは、洋一の作戦はミッションコンプとはいっていいらしい。

今夜部屋に戻らなかつたら、真子は更に疑いをつのらせるだろう。

彼女一筋、と言うわけではまったくくない洋一だが、長年染み付いたクセで、女性を泣かせるのは嫌いだった。

まあ、本人は気がついていないだけで、河原の石の数ほど泣かせてきているのだが。

いつも悪気の無い加害者と言うこの夕チのよくない男は、さらに考

える。

「……そもそもなんで俺は、自分の部屋に帰りたくなくってイライラしてんだ？」

答えはすでにでている。

目をそらせたい事実ではあったが、母の部屋に行きたいのだ。もう一つ突っ込んで言えば、女装して遊びたいのだ。

そこまで考えて、恥ずかしさで顔がボワンと赤くなり、また恥骨のあたりもムズムズとしてきはじめた。

洋一はうつむくと、爪を噛んでそれに耐えた。

「……兄貴？　どうかなさいましたか？」

ずっと無言でいる洋一を心配したシンが声をかけるが、耳には全然とどいてはいない。

行きたい。だけど行けない。

出ている二つの結論の狭間で、洋一の心は揺れにゆれている。

「……兄貴、真子さんとなにかあったのですが……」

あんなに苦しそうな顔になってしまわれて

洋一の揺れがシンにも乗り移ったのか、兄貴の事ならなんでもわかる、そう強く思っていた心が揺らぎ始めて、彼も苦渋に満ちた顔になる。

シンはあるいは真子以上に洋一にたずねたかったが、いらぬことを聞いて兄貴を苦しめてはならぬと、じっと耐えて待った。

この男は昭和以前に、しかも女性として生まれてくれば良き妻、そして良き母として立派であっただろう。

だが現実には、男でヤクザ見習いなのだ。

そんなシンの存在などすっかり忘れて、じりじりと洋一は考え込んでいたが、やがて理性が勝って、毅然と顔を上げて命令した。

「シン、部屋に帰る。車を出せ」

「わかりました」

車体を沈みこませず、するりとジャガーはすべり出すと、ホテルのエントランスから車道へと走り出していった。

「兄貴、降りずにしばらくお待ちください」

洋一の住むマンシヨンの駐車場でジャガーが止まり、外へ出ようとしたら、シンがそういった。

「なんだ、妙な野郎でもいるのか？」

ドンパチなど数年に一度あるかないかの、平和な街の暴力団だ。

ヒットマンなどいるはずもなかったが、いちおう職業柄そういつてみた。

だが本当は、少しヤクザらしいことを口にしてみたただけである。

シンは何もこたえず、自分の唇に人差し指を立てて洋一に黙っているようにジェスチュアすると、さっとジャガーを降りて猫のように階段へと消えてしまった。

いぶかしく思いながら煙草をふかしていると、すぐに帰って洋一にささやいた。

「真子さんと綾乃ねえさんが部屋の前で言い争ってます。どうやら鉢合わせしてしまったようで。いま上がられると不測の事態になるかと思っていますので、ここは離れましょう」

この街一番の高級クラブ「セブンシーズ」のNo.1ホステス綾乃の名前を聞いて、洋一がひるむ。

「あいつは物分りはいいが、浮気は許さないやつだ。血の雨が降る……」

「どうしましょう？水音さまのところにもまいりましょうか？」大学の講師をしている水音の名前に洋一は、今度は首を横に振る。

「いや、あいつは今イグアナの研究で忙しいはずだ。邪魔しちゃならねえ」

「……さすがです、兄貴」

彼女同士を激突させておいて、さすがもなにもないはずなのに、シンはそうやって洋一をほめた。

「それではどこか部屋でもとりましょうか？」

そうやって洋一の顔を見たシンが、あつとおどろいた。

「……あ、兄貴が笑ってらっしゃる！」

洋一自身も気がついていなかったし、またシン以外の者ではわからないくらいだったが、微妙に彼は笑っていた。

あの部屋に行く理由ができた喜びが、隠し切れないものとなって出てしまったのだ。

おどろきを表情に出さぬように苦心しながら、シンは洋一の言葉を待った。

「おまえはここで帰れ」

「はっ？」

「俺を降ろして帰れ」

「兄貴……」

逃げずに二人の誤解を解こうとしている、そう思ったシンは、やっ

ぱり兄貴は立派なお人だと感動する。

「それではどうかご無事で。何かありましたらすぐに連絡をください。事後処理用の道具を用意して事務所で待機していますから」
洋一のことになるとおかしくなるこの男は、物騒なことをさらりと
言つと、きつちり90°の礼をしてからジャガーに乗って去つてい
った。

車が完全に視界から消えた後、さらに10分待ってから通りに出て
確認して、洋一は足早に自分のマンションから立ち去った。

お散歩

その夜、母のマンションに来た洋一は、昨日とは別のメイド服を着て鏡の前に立っていた。

昨夜は黒。

そして今夜は黒を基調に白いエプロンが強調された、本格英国風ハウスメイドであった。

…… 母さん…… なぜあなたはこんな物を持ってたんですか？

10年前といえ、東京は秋葉原でようやくメイドブームが隆盛し始めた頃だろう。

なのに凛はこの地方都市に住みながら、何ゆえこんな代物を、またどこで手に入れたというのだろう。

自分の知らなかった母の一面に洋一は、マリワナ海溝をダイブしてのぞいたような戦慄を感じて身を震わせた。

だが、何者も恐れる必要の無いヤグザの彼を、それ以上にビビらせていたのは、内なる自分からのメッセージであった。

…… 出ちゃえ…… そのままの格好でお外を散歩しちゃえっ！

内なる者は、彼の脳内にダイレクトにそう語りかける。

あの日から自分の中に魔性が宿ってしまった、そう洋一は感じていた。

そいつが耳をふさいでも、目をつぶっても、ずっとささやきかけてくるのだ。

…… 絶対にバレないってっ。夜だし、コスモメイクもカン

ペキだし！

なぜか内なる魔性の声は、うら若い女性の声であった。

それはさておき。

あくまで自分基準だったが、割とよく似合っているのもまた事実。それに、なにより外へ出たいという欲望は、檻から出された獣のように凶暴で押しとどめようが無い。

理性と言うか細かい手綱が切れるのは、もはや時間の問題であった。

洋一はなんとか気を静めようと、キッチンにあるバーカウンターから無造作に酒瓶を選んでつかみ取ると、そのまま口をつけて一気に飲んだ。

そしてその瞬間に豪快に吐き出した。

洋一の口は、まるで農家のスプリングラーのように、アルコールを霧と化して部屋中に撒き散らす。

「ゴホ、グホ、ゲホ、グハハハッ」

あらゆる擬音を並べながら、咳き込んで、床に膝をついて苦しむ。

手放されて転がった酒瓶のラベルには、「スピリタス」と書いてある。

それはアルコール度数96。と言うウオッカであった。

もはや酒ではないと思われるそれを、吐き出したとは言え、ボトル半分は一度胃の中に納めてしまっている。

おまけに今日は、シンの淹れてくれた紅茶以外の物は何一つ口にしていはいない。

すぐに強烈な酔いが全身に回ってきた。

洋一は腰が抜けてしまい、そのまま床にへたりこんだ。

「あ・・・あははははははっ」

女装の快感にアルコールの多幸福感が加わって、彼はへらへらと笑い出す。

お出かけストップ作戦はこれで成功かと思われた。

……この調子で酔いつぶれてしまえ！

メイド洋一は、あらゆる酒を棚から出してきてグラスに注ぐと、つかえひっかえ飲み始めた。

バーボン、ラム、ウイスキー。焼酎に泡盛、紹興酒。

凜のアルコールギャラリーは、場末のバーなら軽くしのいでしまうくらいのラインナップだった。

そうこうする内に、やがてアイライナーでパキッと決まっていた目がとろーりと緩み、シャドウを塗ったまぶたが下がってくる。

そうになると、今まで涼しげだった瞳が、なんだかエロティックなものへと変化してきたように洋一には思えてきた。

なんとこの男は、小さな手鏡を手に、己の顔を肴に酒を飲んでいるのである。

わずか二日という短い期間で、洋一は完全無欠の変態さんと化してしまっていた。

「う……うふふふ……あははは」

よかれと思ってやったアルコールで撃沈作戦は、別の効果を表し始めていた。

ドキドキを落ち着けはしたが、同時に理性をも眠らせてしまったのだ。

なぜなら、笑い声がすでに女性化してきている。

「行っちゃおっか？」

心の中でつぶやいたつもりが声に出ていた。

もう完全に染まってしまっている。

「行っちゃえーっ！」

内なる魔性の声も、言葉となって口から出た。

洋一はフラフラと立ち上がると、揺れながら玄関へと歩き、豪華な彫刻の施されたシューズボックスを開いた。ずらりと並ぶ靴の中から、茶色い編み上げブーツを取り出して足に突っ込んだ。

お約束のようにそれはピタリと彼の足に収まる。

もう縛るものなどどこにも無い。

洋一はドアを勢いよく開けると、羽ばたくような足取りで、部屋を出て行ってしまった。

午前2時の夜の街。

繁華街から少しだけ離れた通りを、ぼくぼくと行くメイドさんが一人。

左手にシェリーの瓶を持ち、楽しげにハミングしながら、満面の笑顔で歩いている。

夜もふけたとはいえ、そこは街の中心地。人っ子一人いないわけではない。

薄暗いネオンの下を、大手を振って行進するメイドの姿は人目を惹いた。

ある者はヒューツと口笛を吹いて感嘆し、またある人はおおっと酒臭いため息をついた、

そんな人々の視線などお構いなしで、かっぽかっぽとブーツを鳴らして、紅椿一家の二代目・メイド洋一が行く。

「うふふ、楽しいわぁ、愉快だわぁ、幸せだわぁ」

まったく客観性のない感想を口にしながら、にこにここと笑い続けて

いる。

そうやって裏通りを歩くうちに、ふと脇を見ると、震えながら店の残りの酒を探している、老いたホームレスの姿が目映った。

「おじいさん、これを差し上げましょう」

笑顔で洋一は手に持っていたシエリーを押し付けると、おどろく老人を後にしてまた歩き出す。

すると今度は、小さな居酒屋の店先で、数人の若者が一人のおじさんをボコっている光景が見えた。

「ダメですよー、そんなに大勢で蹴ったりしちゃ。加減なさい、かげん」

「あア？なんだよねえちゃん。ヤっちまうぞコラ！」

凄む男の顔面に綺麗な前蹴りが入り、何かが碎けるイヤな音がした。

「うわあ！なにこいつ！？」「ああ・・・見えた、黒いの・・・」
残っていた二人にも、それぞれ回し蹴りと裏拳がご馳走された。

「う、早い！・・・」「おおっ！今度はヒラヒラが・・・」
その言葉を最後に、二人は崩れ落ちた。

ボコられて丸まっていた会社員Aさん（45歳・課長）は、笑顔で三人を秒殺してしまつたメイドさんを唾然とした顔で見ているが、彼女がくるりとこちらを向いたので、本能のままに逃走した。

「メリメリっていったねー、あの子の顔・・・うふふ」
恐い事を可愛くいつてからまた歩き出す。

今度は妖しいネオンが点るバーの前に、原型がわからなくなるくらいまで化粧をした少女たちがいた。

職業上のクセで、じーっと目を見ながら通り過ぎようとした洋一の背中に、剣呑な声が降りかかった。

「ちよい待てよおまえ！なにジロジロ見てんだよ」

振り返って蹴りの軸足を決めたところで、彼の足が止まった。

ニセフェミニストな性格がよみがえって、女性に蹴りを入れることを阻止したらしい。

少し考えてから、ひょいっと服の両袖をつまんだ。

一瞬の内に、闇にキラリと光る細長い刃物が二本あらわれた。

それを見てひるむ少女たちの前で、小さく洋一の左手が動いた。

並んで立つ少女たちの間を縫って、真後ろにあったバーのサインポールに刃物が突き立つ。

「こ、こいつなんかヤバイ！」

笑顔で超絶テクを見せたメイドに恐れをなし、彼女たちはワーツと逃げ出した。

可愛く手を振ってそれを見送ってから、サインポールに刺さった刃物を抜いて袖の中にしまうと、洋一はまた歩き出した。

「フンフンフン あはははっ」

楽しくって笑いが止まらない。こんな気分を味わうのは初めてのことだ。

危険なメイドの洋一は、そう思いながら手を振ってトコトコと歩いてゆく。

その後姿を、路地裏を横切っていた黒い猫が、不思議そうな目で見ていた。

いつの間にか裏通りを出て、車の走る国道脇の歩道を洋一は歩いていた。

走る車のライトで照らされて、さっきよりその姿がよく見える。

ひたすら破滅への道に行く彼の頭の中には、今の自分に対する違和

感や見られることへの恐怖は微塵も無い。

そうやって歩いていく内に、後ろの方からハデなバイクや車に乗った、地方にしか生息しない人たちが現れた。

ゆっくりと蛇行しながら走る彼らの内の一人が、洋一の姿を目に捉えた。

「あ、メイドがいる！」「うひょー！エロいぞこのやるうっ」「おねーさん！俺らと遊んで」

欲望丸出しのセリフに、洋一が笑顔で手を振って答える。

その仕草が、彼らの中に暗いものを沸き起こさせた。

キーツとブレーキ音を響かせてバイクと車が止まり、全員が洋一の方へと輪を作ってやってくる。

「メイドさん、ダメだよ、こんな夜中にそんなかつこうで歩いてちゃ」

「そうそう、ヘンなことされちまうよー」

おまえらが今からやるんだろうが、と突っ込みたくなるくらい分かりやすいセリフだ。

なのに、なんのことだかわからないという顔でしばらく洋一は考えていたが、やがて大きくうなづくと、サッと男たちの間を駆け抜けた。

「あ、逃がすな！」

振り返って追いかけようとした男たちの前で洋一は立ち止まると、道に止めてあったバイクや車のキーを片っ端から抜いて、「えいっ！」と叫んでビルの谷間へと放り投げた。

男たちは、えっ？という顔をしていたが、やがてそれぞれキレた顔つきになって飛びかかってきた。

右手で一発、左手で連続二発で三人を沈めると、くるりと身をひるがえして洋一は逃げだす。

長年の経験で、多勢を相手にするやり方を、忠実に身体は実行していた。

- - - - 残り6人ねっ

だが心中のセリフは女性のままだ。

初めて履いたヒールの高いブーツにもかかわらず、洋一の足は軽く男たちを引き離す。

ちらつと振り返って、少し彼らがバラけてきたのを確認すると、すばやくターンして、先頭の男のみぞおちに手のひらを叩き込んだ。次の男は木刀を持っていた。

上から襲ってきたそれをステップでかわし、ブーツで踏んづけてから膝蹴りを顎にお見舞いする。

木刀があればもう無敵だった。

「あっははははは！」

甲高い声で笑いながら洋一が、うっと手を動かすたびに、男たちは一人づつ倒れてゆき、誰も自分に近づけない。

恥骨の奥の痺れに熱い何かが加わり、そこから背筋へと駆け上がってくる、電流のような気持よさに脳が麻痺した。

アドレナリンと女性ホルモンが全身を駆けめぐり、不思議なエクスタシーをもたらして洋一を震えさせた。

歩道には、いつの間にか何人も野次馬が集まり、口々に何かを言い交わしながら自分を見ている。

ドクン。

大きな音をたてて何かが流れ込んでくるのを感じた。

それは、眩暈がしそうなほどの快感の液体。

- - - - あ・・なんかきそう、これ・・・・

その時、辺りに無粋な男の声が響いた。

「コラーツ！　うちの事務所の前でなにさわいどんじゃ！」
叫び声がした後ろのビルの中から、数人の男が駆け下りてくるのが
見えた。

―――― あっ、シン！

その中の一人を見て、洋一は正気に戻った。

逃げ回っている内に、どうやら自分の組の前で暴れていたらしい。
木刀を投げ捨てる、洋一はダーツと走って野次馬の中に突っ込
だ。

「すっげえ！　メイドさん、カツコイイ！」　「おねえちゃんやるなあ」
「顔見せて！」

見物人の中をうつつむいて駆ける彼の背中に、そんな様々な声が降り
かかる。

―――― ヤっべえ！　とんでもねえことしちゃった
男にすっかり戻って深く後悔したが、すでに遅い。

スカートをはくがえして夜の街を駆け去る洋一は知らなかったが、
今夜、彼は伝説の扉を開けてしまっていたのだった。

起動

どこかで電話が鳴っている。

「………うるせー、誰か出るよ早く！」

眠りの中を浮上しながら、洋一はそう思ってたうなるが、電話の音は止まらない。

「………誰もいないのか？ 真子、綾乃、水音、出てくれ。………シン。おいシン、出る！」

そこで飛び起きた。身体中が痛い。

どうやら床の上で寝てしまっただらしかった。

座り込んでぼんやりと首を回した先に鏡があって、その中をのぞいた時、洋一はカツと目を見開いた。

長い黒髪に薔薇色のリップ。

昨日の記憶が音をたてて流れ込んでくる。

起き抜けだったが、頭はすばやく事態を把握していた。

ケータイを探し出すと、ボタンを押して耳に当てる。

「兄貴、おはようございます。今どちらですか？」

爽やかなシンの声が鼓膜に流れ込み、昨夜の彼とのニアミスがまざまざとよみがえってきて、洋一は顔を真っ赤にした。

「………兄貴？ 具合でも悪いんですか？ すぐに迎えに行きますから、今いる場所を………」

「大丈夫だ、くるな！」

思わずそう叫んでしまったから、うつと言葉に詰まる。

いらぬことを口走ってしまったと、死ぬほど後悔したがもう遅い。

はたしてシンは、己の兄貴の異変を的確に察知して、声をひそめて聞いてくる。

「……わかりました。大丈夫です、誰にも言いませんから。で、新しい彼女のところですか？」

「ま、まあそんなとこだ」

「では秘密にしておきますので場所を……」

「それはダメだ！」

「えっ？」

「あ、いや……この人はカタギの娘さんでな、ヤクザの俺が迷惑をかけるわけにはいかねえんだ」

「……兄貴。真子さんや綾乃姉さんも一応カタギですよ。水音さんなんか大学の先生ですし」

「バカヤロウ！事情があるんだよ、事情が」

「ですが、二代目の居場所も知らないでは、組に顔向けできません。そう言われてもこっちも困る。」

墓穴掘りまくりだったが、なんとか誤魔化そうと洋一は必死になった。

だが、シンの執事的とも言えるカンの方が早かった。

「兄貴……彼女とかではなくて、何か妙なことになってるんじゃないですか？」

彼が重要な事をたずねてくる時の、控えてはいるがうむを言わせない強い口調である。

「え、妙なことって？」

「病気とか」

おしい。半分くらい当たっている。だがその言葉に洋一は蒼ざめた。なんと鋭い男なんだと舌を巻くが、ここは認めるわけには行かない。

「いや、元気元気。ちょっと二日酔いだけだ」

「何か心配事でもあるんじゃないですか？」

「ないってそれ。ほら、仕事も順調でトラブルとかもないし」

「そうじゃなくって。プライベートとかで」
「充実してるよ。それ、なんていうの、リア充ってやつ？あれだし」
「それにしても声が微妙に震えておられますが……」
おまえは刑事か、と叫びたいくらいのカンと追及だったが、じつと洋一は耐えた。

…… シンには使いたくなかったが…… しかたがねえ、
二代目パワーで行くしかない
ドスの効いた声で言った。

「おう、シン。てめえ二代目の言うことうたがってんのか？四の五のいわずに言うこと聞けや！」

「…… 申し訳ありません」

「今から事務所に行く。おまえはそこで待ってる」

わかりました、と悲しそうな声でこたえたシンに胸がチクリと痛んだが、こればかりはしかたがない。

洋一はケータイを切ると、バスルームに飛び込んでメイクを落としてシャワーを浴び、出かける支度をしてマンションを後にした。

すっかり落ちてしまった太陽に背を照らされながら、洋一が事務所に入っていったのは午後5時だった。

シンと顔を合わせるのは気まづかったが、そこは彼も付き人。しかも超一流なので、表面上はいつもと変わらずに洋一に対して接してくれる。

今の肩書きである組長代行として、二、三の案件の報告を受けて指示を出し終わると、もう洋一の仕事はなくなってしまった。責任はあるが、はっきり言ってメチャクチャ楽勝のお仕事内容である。

まあこのポジションに上がるまでが大変なのだが、親の七光りでスポンとなんの苦労も無くそこに収まった洋一は、そのありがたみにまったく気づいていない。

普通はそこからでも所属している広域組織での上を目指すので、何かと政治的な気苦労が絶えないのだが、上昇志向皆無でまたその必要性も理解していないから、今のところ遊んでいるようなものであった。

しかし彼はその生活に満足していなかった。

前も、そしてあの時まで、ずっと。

だが女装子とぶつかってしまった、あの夜からちがいはじめた。

本皮のデスクチェアに深く身を沈め、あごに手をあてて、アンニユイな表情で洋一は考え出した。

.....まさかあんな世界があつたとは、まったく知らなかったぜ

男である時とはまったく違う、見られることでの快感。

女性の物を身に付けることでの開放感。

そして、女装した自分と暴力との不思議な一致感。

今までは置かれた状況の為にしかたなく、どちらかと言えば嫌々暴力をふるっていたのだが、昨夜は違った。

躊躇い無く放った前蹴りで砕いた鼻骨の感触を思い出し、洋一はうつとりとした。

また恥骨の奥がピクリピクリと震え始め、その快感によだれが出そうになって、はっと口を閉じる。

変態を音速で乗り越えて、異常者として覚醒してしまったのだろうか、この男は。

その一方で洋一のクレバーな部分が、自分を冷静に分析する。

でも、ついに女装で外に出してしまった。てことは、次は誰かとその姿で会いたくなるんじゃないか……

恐怖が身体を突きぬけ、うわっと叫びそうになって口を手で押える。心臓が16ビートで踊り始めた。

そう、この欲望はエスカレートしてゆく定めなのだ。

一般人なら茨の道くらいだろうが、極道稼業の洋一にとって、それは破滅への階段である。

しかもその段数は、絞首台へと上がる13階段より短いと思われた。じんわりと嫌な汗が脇の下を伝う。

しかしその一方で、ビビればビビるほど、女装に対する欲望と快感を求める声が高まってくる。

内なる魔性がふわりとささやきかけた。

仕事もう終わったんでしょ？ 行こうよこれから。ほら、すぐに。まだ暗くなってないからドッキドキもんだよー！

洋一の表情が、上半分がヤクザフェイス、下半分が笑顔という、複雑怪奇なものへと変化した。

はあああああ、もおたまんないっ！
がっくりと首を垂れた。

やはり普通ではなくなっていたのだろうか。

自分をじっと見つめている視線に、洋一はまったく気がついていない。

二代目の影としてひっそりと壁の花と化しながら、シンはずっとマイ兄貴のことを観察していた。

- - - - 兄貴には絶対に何か困っていることがある！

忠実な付き人は今、そう確信した。

シンの心の中にある、エキセントリックスイッチがパチンと入る。

今の洋一と同等、いや、それ以上に危険かもしれない男が、ついに起動してしまったのだった。

玲

その日、玲は通っている女子高で奇妙な噂を耳にした。

放課後、帰り支度をして、自分が記事を書いているタウン誌のネタ集めに街へとでようと考えていたら、まだ居残っておしゃべりしていたクラスメイトの話が聞こえてきた。

また彼氏とかの話だろうとは思ったが、新聞部平部員……だが実は部長を影であやつる真の支配者……玲の記者本能がつい発動して、聞き耳をたてた。

「あたし昨夜、すごい見ちゃったあ」

「なによ、またしょうもないことでしょ？」

「ちがうつてば。あのね、戦闘メイド見たの、あたし」

「はあ？ それってアニメかなんかの話？」

「だーから、ちがうつて！リアルのお話。あたしメイコたちと夜中までカラオケいってて、そんで2時くらいだったかなあ、アーケードの裏を通って帰ってたわけ。そしたら西商業のヤン姉たちがいてさ。うわヤバって思ってたら、先に絡まれてる人がいて。それがメイドさんだったんだけどね。まきこまれのイヤだったから、あたしかくれて観てたの。そしてらなにやったのかわかんないんだけど、西商のヤツらワーツて逃げ出していなくなっちゃったの」

「それって、メイドさんがなんかやったわけ？」

「うーん、そこまではわかんない。でね、あたしなんかおもしろそうって思って、そのメイドさんの後をつけたの。そしたらその子が国道に出たところで、ハルオさんとこのチームが走ってきて」

「うわっ、あのタチ悪い人！」

「そそっ。たぶんあれはあの子さらってなんかする気だったんじゃないかなあ。みんなバイク止めておりてきて、メイドさんかこまれちゃったの」

聞かされている子は、鼻息も荒く顔を近づけて、話の続きをせがんだ。

「そしたらメイドさんが暴れだして大乱闘！めちゃくちや強いんだって、それが。たぶん空手が拳法だねあれは。で、ハルオさんたち秒殺！」

「なにそれ、ほんとに女の子なの？」

「うん。女装子であれだけきれいな子はいないとおもうから、女の子だと思う。で、全員やつつけちゃって、そのうちにやつちゃんま出てきて大騒ぎよ」

「え、ヤクザも返り討ち？」

「ううん、さすがにそれはないよ。やつちゃん出てきたところでメイドさん逃げちゃっておしまい」

「ふーん…… まあ作り話にしては面白かったわ。漫画に描いたらまた見せて」

話を聞いていた子は、ニヤニヤと笑って立ち上がると、教室の出口の方へと歩き出した。

「なによー、それ！ちがうって、マジ話なんだってばー！」
しゃべっていた子も、怒りながらそれについてゆく。

肩越しに顔をむけて二人を見送って、玲は考えた。

「…… ほんとかな？ たしかあの子、漫画描いてるっていつたからネタなのかも。でもダメ元で今夜さぐってみるかな」

机の上に置いていたスポーツバッグを拾い上げると、玲は軽い足取りで教室を後にした。

午後10時。

自宅を出た玲は、タウン誌のスポンサーになっている店や、顔見知りの店へ挨拶がてら入って行っては、ネタになりそうなものを物色した。

高校に入っすぐ、遊んでいたところでタウン誌の記者と知り合っ
て、雑誌作りの真似事をするようになった。

そして高校三年の今、玲はすでにタウン誌の有力助っ人ライターとして、編集長の覚えも高かった。

この仕事を手伝いだして知り合った人たちも、活発で妙に人懐っこいこの娘のことを、子ども扱いせずにかまってやり、ささいな街の情報でも教えたりした。

行動的乙女である玲の夜は短い。

肩までの明るい茶色の髪を夜風に流しながら、玲はきびきびとした足取りでその健康的な身体を運んでゆく。

あちこちに顔を出す内に、あつという間に日付が変わって、玲は少しあわてた。

----- やばっ！ そろそろアーケードの方にいかなきゃ

広告を出してくれると約束してくれた居酒屋の大将にお礼を言うと、玲は急いで表に出た。

アーケードへと早足で歩きながら、さつきスポーツバーのマスターに聞いた話を思い出していた。

そのマスターが、野次馬としてメイドさんを目撃したと言ったのだ。

「いやあ、凄かったよ玲ちゃん、あれ。華奢な子でね。外人かハーフかと思ったくらい綺麗な顔してんのに、木刀持って男をメッタメタにしちゃってさあ。あれって絶対に剣道の有段者だよ。どこのイ

メプレの店に勤めてるのかなあ。行ってみたいなあ、俺
思いつく内に、玲の瞳が段々と光を帯びてきた。

-. -. -. 空手に拳法。おまけに剣道ねえ. . . . おもしろ
いじゃないっ！

この平和な地方都市では、10年に一度あるかないかというネタだ。
話がもし本当なら、今それをタウン誌で取り上げれば、何か新しい
波を起こせるかもしれない。

自分が、すごく大きなものの鍵を握っているような気分になって、
玲は背中がゾクゾクとしてくるのを感じた。

肩から下げたバッグの中に、デジカメとボイスレコーダーが入って
いるのを確認してから、玲は足に力を込めて急いで歩き始めた。

レディ・チャイナ 1

午前1時。

人気の絶えた地下街に、コツコツとピンヒールの音が響き渡る。

ホームレスの辰さんは、その夜めぼしい得物にありつけず、空腹を抱えてダンボールハウスの中で寝ていた。

―― ああ、せめて酒が見つかってりゃ、ちつとは飢えもしのげるっていうのによオ……

茶色から黒へと変色しかかっている毛布を巻きつけて、辰さんがブルツと身を震わせたその時、前を通り過ぎようとしていた足音が止まった。

すわっホームレス狩りの若者かと身構えると、ガバツと入り口のダンボールが剥ぎ取られ、何かがそこから投げ入れられた。

「うわあ！」と声をあげて頭を抱える辰さんの身体に、何やら軽い物がポコポコと当たって下に落ちる。

次に、ガチャンとガラスの触れ合う音をたてて、大きなビニール袋が床に置かれた。

「寒くなってきましたね。皆さんでこれ分けて召し上がってください。少しは温まると思います。どうか気を落とさず。きつと楽しいことがありますよ……」

地下街の照明が邪魔して姿は判らないが、そんな女性の声があった。

まだ固まっている辰さんの耳に、またピンヒールが道を叩く音が聞こえ始め、遠ざかってゆく。

そっと目を開けて、自分の身体に当たった物を手にとってみると、

それはあたりめの袋。

暗闇で見えなかったが周りには、乾物屋かと言いたいくらい、乾き系おつまみの袋が散乱しており、入り口には酒瓶が詰まった袋があったのだ。

なんだかわけがわからなかったが、危険は無いと悟った辰さんが、おっかなびびっくりダンボールハウスから顔を出して外をのぞく。

煌々とした光に照らされながら、背筋を伸ばして去って行く、派手な後姿が見えた。

真紅のシルク生地に、鮮やかな刺繍で大きな龍が描かれた、全身をタイトに包むチャイナドレス。

左手には、ロンリコ・ラムの瓶が握られている。

そう、言わずと知れた、洋一の姿であった。

やっぱり女装して街へと出てきてしまったのだ。

彼は始め、己の足を殴ってあの部屋に行くのを止めようとした。

だが、ただ痛かっただけで、足は普通に母のマンションのドアをくぐっていた。

今度は、手を押えて女装を止めようした。

しかし、気が抜けて鼻をほじった瞬間に、女装が始まってしまった。せめて部屋の中で我慢しようと思いたが、鏡に映る自分の姿に満足して、ついつつかり傍にあった酒を飲んでしまっ、全ては終わった。

…… そうだ！ホームレスのおじさんたちにプレゼントを持っていつてあげよう！

そんなムチャムチャな理由をつけて、洋一はそのままの姿で外へと飛び出したのだった。

差し入れが、あたりめや酒だったのは、かけらほど残っていた男と

しての本能がチヨイスさせたものかもしれない。

アルコールで解放された魔性によって、洋一は地下道を通り、地上へと続く階段を登り始めた。

その足取りに、ためらいや戸惑いは微塵も無い。

女装お散歩を開始してまだ二夜目だというのに、ピンヒールを危うげなく履きこなし、声まで女性化しているこの男はいったいなんなのだろう。

正体不明の曲をハミングしながら大手を振って……今夜はスリットの深いチャイナなので足取りは静々だったが……中華乙女・洋一は地上へと舞い降りた。

白檀の扇子を取り出し、パタパタと顔をあおぐ。

どこへ行くこうかと考えているようだ。

正面はアーケードの西の入り口。

左は飲み屋街へと続く道で、右は繁華街を取り巻いている国道だ。

やがて行く道が決まったのか、優雅に扇子を仕舞うと、洋一は右に足を向けた。

艶めかしく揺れる腰と、スリットから見え隠れする白い足が、暗闇の中へと消えていった。

玲はアーケード北口にいた。

ダンスの練習や弾き語りであつたう人々が両脇に並ぶ中を、彼女は左右に目を配りながら歩いてゆく。

キャッチの黒服をかわし、横に並んで道をふさぐ酔っ払いの大学生を睨み倒しながら、玲はどんどん南へと進んでいった。
やがて信号が現れて、一番人通りに多いアーケードが終わった。
信号待ちをしながら考える。

..... やっぱ人の少ないアーケード方かな？それともこの周りの裏通りかな？

考えている内にパッとシグナルが青に変わった。
くるつと90°ターンすると、玲は右へと足を向ける。

繁華街を取り囲む国道と平行して通っているアーケードの方ではなく、さきほど歩いてきた周辺をまた探るつもりのような。

タクシーが縦列駐車するのを脇に眺めながら、玲は肩にかけたバッグを揺すりあげると足を早めた。

洋一は国道脇の歩道を悠々と進んでいた。

この国道は、さきほど玲が渡らなかつた交差点から、彼が初めに出てきた地下道へと続いて通るアーケードと平行してはしっている。
昨夜、洋一が暴れた国道とつながっていて、今はちょうど真逆の位置を彼は歩いていた。

この辺りはデパートなどの大型店が立ち並ぶ区画で、深夜の人通りは少ない。

それでも彼の姿は人目を惹き、酔客から好奇の視線がそそがれた。

を疑い、何度も何度もこすって確認した。そのために目が真っ赤になった。

「……間違いない、兄貴だ……姿形が変わっていても、俺が兄貴を見まちがうはずがない」

そう確認すると共に、あまりに恐ろしい現実には、シンは身体が震えてくるのを感じた。

だが、全てはちゃんと見届けてからと考え直し、ヒタヒタと洋一の後をつけてきたのだった。

そうやってついてゆく内に、シンは自分の身体の異常を感じてふと考えた。

「……おや、まだ身体が震えている。もう落ち着いているはずなのになぜ？」

そういえば心臓もまだドキドキしていた。頬もなんだか熱い。しばらく変調を不審に思っていたが、今は兄貴のことと、また意識を前に向けたとき、洋一の行く手を数人の影がふさいだのが目に入った。

「いた！こいつよハルちゃん、あたしらおどしたの」

ある国の原住民をおもわせるメイクをした、やたらと薄着の女の子が洋一を指差して叫んだ。

「牛島さん、こいつっス！俺ら襲ってきた女は」

ハルちゃんと呼ばれた男が、かたわらに立つ大柄な男にそうささやいた。

街灯の明かりからはずれていて、その男の姿はよく見えない。

脅してきたのは彼女の方だし、襲ってきたのはこいつだったが、あの夜のことは快感とシンの顔以外よく覚えていない洋一は、小首をかき上げて考え込んだ。

が、やっぱり思い出せないのです、ロンリコをぐいっと一口飲む。そんな彼の後方では、危険を察知したシンがいつでも飛び出せるように身構えている。

牛島という男が、のそりと暗がりから姿を現した。

身長168cmの洋一より頭一つ、いや一つ半は高い。

短く刈った髪をツンツンに立たせて、四角くえらの張った顔にはいかつい髭がたくわえてあった。

ごつい身体と相まって、見るからに腕力に自信あり、といった風だ。

どうやら昨日、洋一がやってしまったチームのボスキャラらしい。

凄むわけではないが、やる気満々という空気を漂わせて牛島は洋一をにらんだ。

だが彼は、薄笑いを頬に浮かべながら、扇子を使って涼しげな顔をしている。

辺りを不穏な気が取り囲み、暴力の予感がひしひしと高まってきた時、とつぜん牛島の殺気が消えた。

よく見ると、目は厳しいままだが大きく見開かれていて、口がOの字を作っている。

おどろいている表情だった。

そのうち、ごつい身体がプルプルと震え始めた。

手下のハルちゃんとその彼女も牛島の異変に気づき、「なんでやってしまわないの？」という非難の目をむける。

むふーんと荒く鼻息を噴いて、牛島が口を開いた。

声は渋いバリトンであった。

「か、かわいい」

「えっ？」

ハルちゃんと原住民女子が、同時に疑問の声をあげる。

「っ、つきあってください、ぼくと」

「マジ？」

また二人が同時に声をあげた。

彼らの思惑と180°違う展開についてゆけないようだ。

「ひとめ惚れなんです、お願いします！」

もう二人は何も言わない。だがこのセリフには上機嫌でいた洋一もシラフに戻った。

野獣のような男にいきなりカミングアウトされても……たとえイケメンだったとしても同じだろうが……気持ち悪いだけでコメントしようがない。

牛島が一步前に出る。さすがの洋一もこれには半歩下がらずをえな

い。

「ど、ドライブいきませんか？」

「……イヤ」

「じゃ、飲みにでも」

「……ムリ」

「それではちょこっただけお茶でも」

「……てかウザい」

洋一の精神攻撃にも屈せず、牛島は前へ前へとつめてくる。殴り飛ばすわけにもゆかず、下がる洋一。だがその均衡も、牛島の熱愛がついに臨界に達して俄に破れた。彼は猛然と洋一に飛び掛った。

牛島はその時見た。

チャイナドレスのスリットが割れ、細く美しい脚線を描く足が高々と上へとあげられるのと、その足の奥にある物を。

わあ……しろい……！

牛島の顔に喜びがよぎった刹那、彼の右頬にピンヒールがめり込んだ。

直線から鋭く真横に飛ぶ、必殺の回し蹴りだ。

あわれ牛島くんもアスファルトに接吻かと思われたが……彼はやはり体格通りの猛者であった。

首を少し曲げただけで姿勢も崩さず、その身体は微動だにしていな

い。それどころか顔はまだ笑ったままだった。

牛島の手が、まるで愛おしいものに触れるようにそっと足首を捕らえた。

その感触に、ヒツと洋一が悲鳴をあげる。

なんだかよくわからないが兄貴のピンチと、シンが歩道へと駆け出した。

その目の前で、洋一の身体が華麗に空を舞った。掴まれた足を支点にして躍り上がると、空いていた片足から牛島の顔面へと膝蹴りを放ったのだ。

「変形真空飛び膝蹴りっ！」

おもわず技の名を口にして立ち止まるシン。
モ口に決まった膝に牛島が鼻血を噴出すと、その隙に掴まれた足を
はずして洋一は駆け出す。

「牛島さん大丈夫つか！」

そう言つて近寄つてきたハルちゃんをなぜか裏拳で殴り飛ばして、
牛島は叫んだ。

「逃がさん！おまえは俺の女だあ！」

その言葉にかつとなつたシンが、牛島に走り寄ると思いつきり拳を
顎にたたきつけた。

これにはたまらず、牛島は仰向けに倒れたが、そいつにはもうかま
わず、シンはマイ兄貴の後を追つて走る。

だがすでに洋一の姿は消えており、シンはあせつて闇雲に路地裏へ
と踏み込んでいった。

ポツンとそこに残された原住民風女子は、ぶつ倒れている彼氏と牛
島を見下ろしながら、何が起こつたのか理解できずに呆然とするの
だった。

レディ・チャイナ 2

洋一は闇雲に夜の街中を駆けた。

その左手には、あれだけの事態の後なのに、まだロンリコ・ラムの酒瓶が握られている。

どれほど走っただろう。

もう追ってはこれないだろうと立ち止まると、荒い息を整えつつ、さっきの出来事をフィードバックした。

「……うはあ、久々に男に迫られてビビったあ！ でも会って10秒で好きではないよねえ、歌の文句やマンガじゃないんだし

幼少期から青年期までに自分に言い寄ってきた男どもと牛島がオーバールップして、洋一はうげつと顔をしかめた。

それ以上おもいだすのは辞めにして、ロンリコをごくごくと飲み干す。

煙草が吸いたくなってきた。

だが全て部屋に置いてきてしまっていたし、さすがにコンビニへ買いに行くのは、わずかに残っている理性が止めてと言っている。

「……明日からはバッグ持って出よっつ

この男、もうためらい無く女装お出かけを日課にしようとしている。人生のがけつぷちに爪先立ちしていることを、洋一はすっかり忘れてしまっていた。

しかたかない。煙草もないし、今夜はもう帰るかと彼は歩き出した。すぐにタクシーがたくさん並んでいる、アーケード同士をつなぐ交差点へと出た。

この道をまっすぐ西へ行けば、左手にさっき出てきた地下街の入り

口がある。

洋一は空になった酒瓶を信号脇にあるコンビニのダストポットに投げ込むと、カツカツとヒールを鳴らして西へとまた歩き出した。その時……

「みつけたあ！」

野太い声に振り返ると、顔面を血に染めた牛島くんが、ハアハア肩で息をしながらこちらを指差しているのが見えた。

恋する男のアンテナは、捕捉不可能と思われた追跡をやり遂げさせてしまったらしい。

絶句する洋一に、牛島はゆっくりと近づいてくる。

道行く車のライトに照らされて、怪しい光を帯びた彼の瞳が見て取れた。

口を横にイーッと広げて洋一は固まっていたが、牛島が間合いに入つたのを見てさっと車道に飛び出すと、走る車の間を抜けて通りを渡り、北の方角へと逃走を開始する。

「絶対に逃がさん！」

牛島も巨体を車道へと躍らせて追跡してきた。

突然飛び出してきた大男に、走っていた車が急ブレーキを踏む音が辺りに響き渡る。

洋一にはとにかく駆けた。

いつもの彼なら、相手が何者であろうと降りかかってきた火の粉はためらわずに実力行使で払いのけるのだが、なぜか女性化している時は、敵意を持つ者以外への暴力には抑止力がかかるらしい。

ホームレスへの差し入れと合わさって、これは女装状態での一現象と言えるだろう。

追跡を確認しようと洋一が一瞬うしろを振り向いた時、横合いから

ひょこつと女の子が出てきて、モロに二人がぶつかる。

ヒールを軸に洋一はかかしのように回って吹っ飛び、女の子はどしどし尻餅をついた。

「痛っ！」

「ごめんなさい！」

シネマの早回しのように素早く洋一は立ち上がると、女の子の出てきた方へと身をひるがえして走り去る。

こっちもなにか言おうとしたが、相手がいなくなってしまったので、女の子がデニムのスカートのすそを払いながら立ち上がった時、大男が目の前にあらわれ、ビクツとすくみあがった。

男はフンゴフンゴと息を吐きながら叫ぶ。

「どっちいった？チャイナの人どっちいった？」

「あ、あっち……」

その迫力に負けて、つい女の子が去っていった方向を指差すと、スチームのような鼻息を吐いて、大男はそっちにむかって駆け出した。数秒、女の子は啞然としていたが、すぐに目が輝きを帯びたかとおもつと、大男の後を追って走り出した。

……いつもメイドとは限らない。さっきのが噂の人だ！

記者のカンがそう告げている。

カモシカのようにしなやかな動きで大男に追いつこうとしている女の子。

もうおわかりの通り、女子高生ライターの玲であった。

薄暗い路地裏。

アスファルトの上に、規則正しく鳴り渡るピンヒールの音。それにつづく荒い男の息と、軽いスニーカーの足音。

頭上で輝く様々な原色の見本市のようなネオンサインが、走る真紅のチャイナドレスをストロボで映し出す。

次に熊、そして少女。 もとい、洋一、牛島、玲だ。

三人の姿は、まるでスクラップスティックな映画の1シーンのようだ。

チャイナドレスの背中に牛島が叫ぶ。

「お、お名前を！」 「イヤッ！」 「じゃ、住んでるところを」 「もっとイヤッ！」

コメディを演じながら駆ける二人の後ろでは、真剣な表情をしてバツグに手を差し入れる玲の姿がある。

「あっ」

突然、洋一の姿が闇に沈んだかとおもうと、アスファルトの上を転がった。

彼の俊足に耐え切れず、ヒールが折れてバランスを崩したのだ。

肩を押えて立ち上がった洋一の目の前に、両手を上げて牛島が立ちふさがる。

「さあ行きましょう・・・今すぐ・・・」

あらぬ妄想を鼻から噴出しながら、牛島は歩み寄ってくる。

その姿に、洋一の防御センサーが彼を敵と認識した。

ふたたび高まるバイオレンスの予感。

だが、その緊迫を打ち破る声が牛島の背後でした。

「そこの男どいて！ 影になってて写らない！」

「えっ」

玲の叫びに牛島がおもわず振り返った時、洋一の身体が路面スレスレまで沈んだかとおもつと、弾のように前へと突進した。

玲の目には洋一の姿が消えたように見えた。

だが洋一は、瞬時に牛島の懐に飛び込むと、みぞおちに強烈な掌底突きを放ったのだ。

拳での打撃と違って、掌はインパクトを広く深く内臓へと波及する。牛島の目がぐるりと裏返ると、ズーンと音をたてて沈み、洋一の姿が玲の前にあらわになった。

----- チャンスッ！

構えていたデジカメのシャッターが切られ、フラッシュが辺りを白く染める。

しかし、カメラが捉えたのは、真紅の背中だけだった。

シャッターより早く、鮮やかターンで身をひるがえして駆け出す、チャイナの女。

玲は1チャンス1ヒットに失敗して、強く唇をかみ締めてその姿を見送る。

そんな彼女の背後10メートルの位置で、壁に身を隠して一部始終を見ていたシンがつぶやく。

「玲……… なんでおまえが………」

湿りを感じる路地裏で、残された三人はそれぞれの姿で、影となって動きを止めたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5587y/>

女装天女！

2011年11月21日23時52分発行